



2945
卷 23

二十九日
原

昭和九年
七月九日
海味

鎮西八郎 椿説弓張月拾遺卷之五

東都 曲亭主人編次

第五十六回

嶋袋を塞いで、矇雲為朝を焼
餘煙を拂く王女良人と索

為朝の武威中山を動し、逃れを追めてまゝに、行舟輒く石虎山を
取て要害とし、亦龍宮城を攻んとて、うち出ると申す。任候をせり。
矇雲も、うら数百騎、おて金城まで出たり。と報知らる。朝
父もあつて、大に飲ひ、松壽をえかたりて、さうさやう。これ頃日地圖
を閲する。彼金城を龍宮城の西南にありて、大里に背あり。
これ今その前より、攻撃王女後より、これを襲ふ。一挙に矇雲を
擒とせん。疑ひなし。速におきて、只管馬次をえしむる。

田舎町
花子洲

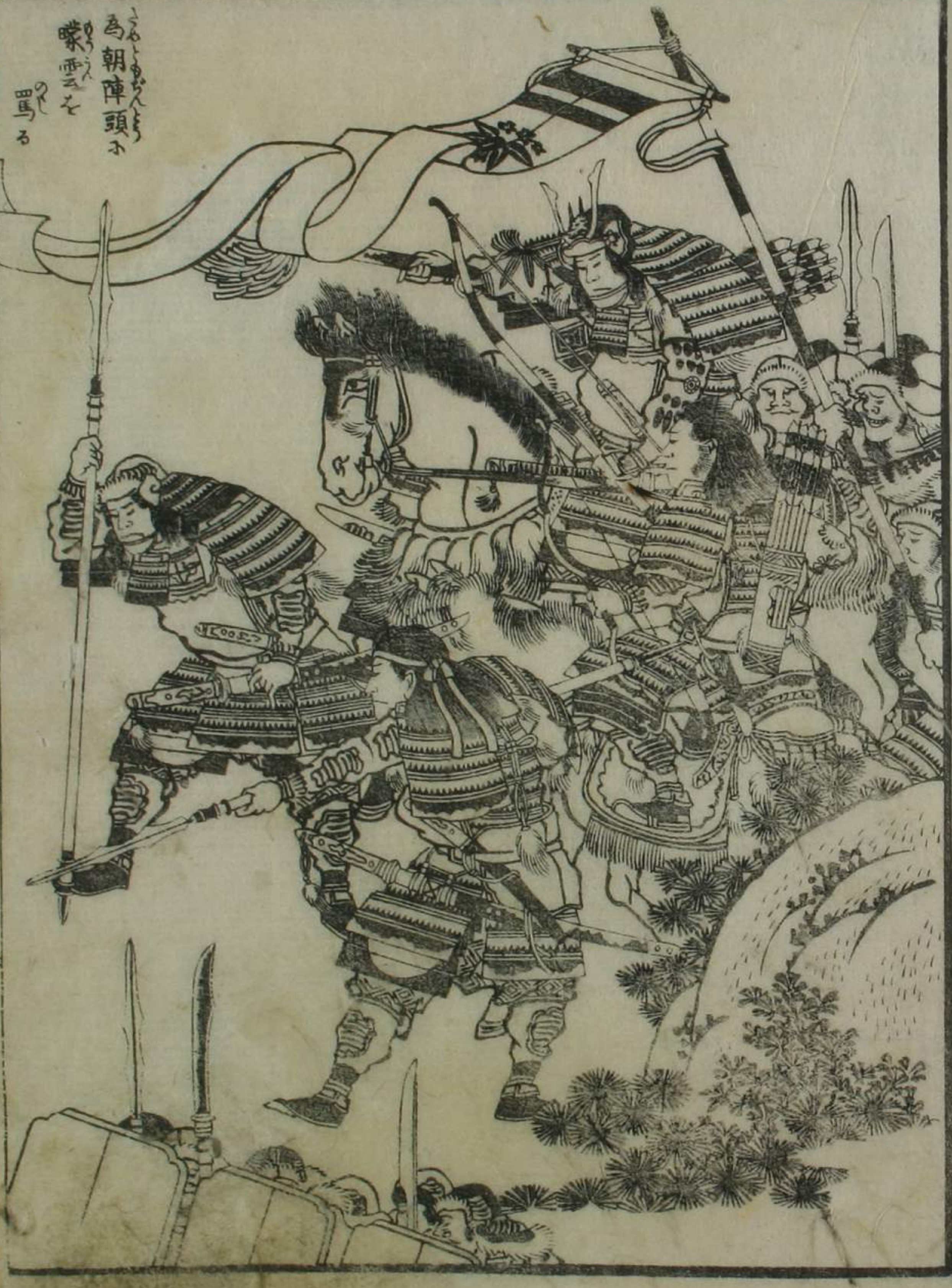
春見子長月拾遺卷之五

松壽亦練てまうにやう。矇雲とあゝ人の胸中を察し千里の外を志るの術あり。大将は且くこの所を陣をせされやう。矇雲はこれ孤懸してその剛臆を試みるべしとまうにやう。矇雲はこれこれと誓ひて豫ての計畧合期せし軍師の異見思ふ過つてこれおのつら分わりと回答もあを鞭を揚馬の足掻を急じ多へ士卒の勇氣日増しにして早雄の壮俊ホも後れと相従ふ抑金城の方數十町の曠原あり馬のかけ引便よく東は崎山あり北は長川ありその地山南に相鄰りて大里へ遠くはこれ代々の國王出格の地方にして左は金城橋あり右は翠巖亭あり為朝既矇雲が陣ひらく馬を駐て前首を借とる多へ群を

これ賊軍四五百騎忽地二隊に相まうれ推出て四輪車に黄羅傘蓋挿かけて。矇吹志をうじ左は棟孫あり右は奇律之あり車のうちあり賊將矇雲頭は流星巾を戴きて身は蛇皮の法衣を着下し肩は竹布の袈裟を掛身は羽扇を合身はる。そのこれ両軍鼓を鳴らし関の声はあをそれ。朝も亦矇雲は左右に從て馬を馳し馳出まう。大将その日の出立を花曇子の真紅に染みし。矇直垂に紫系の鎧金物重く打し。新院より給りし。矇の丸といふ金作の圓鞘の名劔。二尺六寸の太刀を佩添。とらと人の尾の矢。十六指し。を。高は肩ひは

重藤の弓の握太な兵真中把下黄尾毛の馬の太く逞し死小孫
 龍膽を金具不麻をる鞍置に尊総の鞞の焼くろかひなる死
 かけて白旗の下にまゐるその形勢あつて成拂つてこの國人を目小
 馴とぬ武者態威あつて猛う天暗大將軍やどろろりに自身も
 敵もあつて感嘆せざるなりけり。當下為朝の鐘踏張り鞍
 壺小突まわがりて。驟雲を信と眼へ狗黨の悪僧いかなれば。妖術を
 逞し尚寧王を執逆してくく王宮を踏めしに孰しその暴悪と
 憎ざらん武名の荒磯をらる浪の音にも笑ふ目も。又よ大日本
 清和の嫡流八郎為朝とらつてみなり。をわづら王女の縁しお替れ
 去年逆臣利勇を誅し。この秋更お我兵を起して汝を討く。三首の
 民の塗炭を救ふのなり。り露もろりもその非を悔ひ天罰脱れ

如何 編入 長程



為朝陣頭
蒙馬

春説書長月合貴卷之五



其續



其續

其續

かつたをあらば面縛して刃受よと声高かり罵り多し
 噂雲呵々
 とうち笑ひ汝は是れ東方の浮浪人牙のちれ正かたきくにこの國に漂
 ちて。王女と密通して國王の塔と稱し勢ひに乗じて大臣を殺し王子を
 逐つて山南を押領しその悪公虎狼小勝なり。され此の兵を遣して
 生拘りさんと云ひしが万機を暇みけせば年未放しおれられお
 みづろり身はるの夏虫の火虫が燈子より母似り。誰りある這奴暫
 されと下知さればうけもつると回答つ。噂雲が左右なりたれ棟孫
 奇律之二騎相並んで舞くと馬とよとされば朝怒て此も礙とせと
 ころり戦人とあま小沢落龜推隔て衝と馳出迎とみみと戦は
 ありし人もせもせと戦へ賊の両おちらる衰へ馬を落して引くを
 寄手敵の大勢をぬをこん悔してありたり今鶴亀の一陣ハ

刺崩ををえりしよく勇に勝誇られ癖なれは只直推し追ふ終ハ
 噂雲騒ぐ氣色もなく空中を指招けハ一朶の鳥雲まとい降り
 雲の中に一軍の異形の人馬立頭れ進み寄手とけ隔る縦横
 を身小戦へハ松壽下知して齋たれ汚穢りのを柄ながら瓢ハ
 汲うけさしてちとと汝死かかれハ噂雲が魔軍紛くと地上に
 墮るとはくくこれハ或の青紙を剪て兵の形とみしあつひを
 藁次束縛て馬とせり。されむこそ噂賊が女の皮を剥けられとく
 生拘れと大将の烈き下知母諸軍兵服をくられ岡次揚透間も
 なく競ひかかれ折しもあれ噂雲が後陣のうごよりの乱騒げハ
 妖術施す母由なくてや噂雲も車次かへて慌忙き脱んとて朝
 これを商して賊の後陣より乱るハ搦手の軍兵出まりてその背

よりの襲ふなれどし。まぐ東北のうを指塞に城へな入れそと采配
らち揮身方に先づら矇雲が車小眼をわけ追撃するへ賊軍
りよく途を失ひ龍宮城へとほりも入らば長川をさして逃走れを
逢一返せと喚とめて大将さぶら追蒐するふを松葉とくろりめと
なうて矇雲かきつら流の計ありたれ且くどぞりあひ移と声を
かきりに叫べども為朝さら耳にもわけど中山山南の境する茂林
のほとりに到るあふ忽地矇雲をえりしるひ士卒おのくくろり
まどひて左う右かと躊躇折くら天俄頃お結陰日の高たれど野干王
の圍より圍お入るどく。大将を士卒とあくらに士卒の大将をえを風
さ入るも烈しな山鳴動けて樹を倒し。砂と飛して面をうらう。あま
らふあまらも堪がくらふ前後左右賊兵起つる朝を逃とる。

異口同音に呼びうけて射る箭を雨よりふは繁し。今すて勇る
身方の軍兵膽を冷さびとらりありの如く。或は乱箭射倒され
あつひの株お歧き倒れおのが刃お刺傷られ死するりのいぐらと
いふあまらに松壽鶴龜おも賊軍にけ隔らとらん。為朝へと
一騎おかりたまひしけれと。實よれ鎧を急あへば。う前一條も
うらふかかど馬をさひひお急なりじうら其首おもあらば数十
町幸じて走りたすうあ火光幽よええり。此一活されくらし
て彼火を目標お。さかくして走り着てんあふ人家あああ
さしていとも梢高れ森の中に燈籠を掛らるり。暖國なれば
うら枯せぬ草葉長く生茂るり。古廟うとえれば廟もは。こ
何処うらんとして。僅よてらと燈火めて彼此をええり。



本言百別月才道卷二五

樹下小勝余のりて鳴袋の二字以て寫し。その下に朱をりて細書
 為朝に到て死すと書されしが讀も終らざりて大に驚れた。この
 所を山南に屬して大里へ遠くを縁と高き山を包れて東一方を
 ておざりし門を。さるにゆるて鳴袋と名はけり。され圍まふ
 惑ひてあつども。こゝを走り入りしに敵り出門を切塞んに
 いうせして脱と去るを危いといふ。とひとり言して響を引えし
 馳せんとし。まふ。驟雲豫てくる。人忽地駭の柴火のりて出せ
 門を塞だよけと。為朝もとく。こゝを驚れ馬より閃りと飛び
 下りつ。山のごとくに積めげられ柴掻退んとし。まふ。怪しいる
 件の燈籠おのぼり。撲地と落。その火八方に散り乱して秋の螢
 の飛ぶごとく。樹の枝草葉。いづばさらさらなり。まや彼積とれ柴も

らつりて煽くと燃あぐれ。山風あつて吹荒ま。猛火四面に
 散乱。馬とこれ。駭れ狂ひて地を走り馳けり。尾筒を焼と煙
 小噴ひ。賊かつり。斃たり。為朝。水陸の軍。熟て万夫を當
 の勇将。たれども。火を脱れ。術なして。あじう。経。り。て。うら
 拂ひ。ま。ども。その。牙。金石。あ。ざ。れ。上。差。の。征。前。鎧。の。威。毛。直。垂
 の。袖。す。ぞ。も。悉。燒。断。離。られ。烈。火。の。中。に。ま。る。ふ。その。形。勢。ハ。正。小。足
 駿。河。の。牧。に。田。獵。せ。し。日本。武。尊。に。似。たり。され。吹。之。と。風。も。あ。つ。て
 今。ハ。わ。ら。と。お。げ。せ。し。く。鵜。の。丸。の。劍。引。抜。つ。腹。帶。剪。つ。て。鎧。投。と。て
 天。を。仰。ぎ。て。嘆。息。し。時。さ。る。命。が。れ。う。保。元。の。乱。と。よ。り。死。せ。り
 命。が。い。く。た。び。う。脱。れて。こゝに。漂。著。し。今。妖。賊。が。幻。術。火。攻。せ。り。て
 め。く。な。も。武。名。を。他。の。國。に。墮。と。め。り。朽。ち。叫。び。ま。ふ。声。の。こ。煙

の中に交えて今を限りと見えたりまふ。さる程ふ。王女の大里の山
 路より。矇雲が背を襲んとて。まづ間諜者なりて。合戦のやうを
 せしめぬ。そのの走りかたり。また八郎按司の大軍戦ふ毎に
 勝お衆ふ。ひとしきく浦添宜野湾の両城を攻おとし。既に
 赤平まで殺入りまひぬ。と告げけし。さらばいそぎとて。百騎を
 残し。ちかえて。大里の城をちかじ。儀翰田平以下。二百騎を將て。潛
 ち山踏二里むり進まふ。忽地日の光暗くる。應よ嶋袋
 のかこにあたりて。猛火天舟衝て燃あづれ。王女ふり怪て。あれを
 いう。母とむらう。馬を駐めて。えりのまふ。清処は。大里の城とまふ
 軍兵。半刃血は塗れて。走り。息も。あつめ。さう。さう。さう。さう
 も。矇雲が。大將。耳目官。全廣が。四五百の軍兵。天より。や。降らん。地

よりのや。涌ちん。王女の城を出まふ。穴窺ひ。直くと。推おせ。嘯
 叫で。攻らる。城。中。以。の外。母を。勢。つ。れ。命。を。限。り。に。防。ぎ。戦。へ
 とも。力。彼。敵。が。城。兵。悉。く。討。死。せ。り。吾。倚。の。律。の。越。を。ま。う。さん
 と。走。り。ま。け。る。足。を。か。く。人の。い。を。ま。ふ。小。祿。の。峯。南。風。原。東。風。平
 の。城。なん。ども。敵。を。棄。れ。う。り。と。ま。う。し。れ。と。半。せ。う。け。田。平。儀。翰。ホ
 こ。ろ。く。い。う。母。と。呆。れ。果。士。卒。送。お。面。を。あ。い。し。進。退。究。て。え。え。え。え
 折。の。う。矇。雲。が。大。將。棟。孫。捷。路。より。は。し。と。り。久。敷。百。の。軍。兵。勿。心。然
 と。前。面。の。峯。上。お。立。あ。り。れ。汝。ホ。ま。ま。と。や。為。朝。と。長。川。の。ち。と。り
 あ。て。一。千。の。士。卒。妙。り。形。勢。と。ら。れ。竟。お。嶋。袋。お。惑。ひ。入。り。て。猛。火
 の。う。ち。お。身。を。お。け。べ。灰。燼。と。な。り。て。う。せ。ぬ。る。し。命。を。く。く。の。寧。王。女
 を。擲。出。し。て。降。ふ。糸。せ。よ。と。呼。ぶ。る。声。は。谷。お。響。ま。き。嶺。お。答。え。く。駭。く

春記日別月抄卷之五

真逆おとしに馳よせられん。王女と馬と馳あし。小さぶしれかす。鹿の
 鞞。牙のこの國の寧王女武名と良人ともい裏く。白縫姫とあす
 ざるや。女子とて侮らば。目おおせん。と會する。薙刀。水車の如く
 うら繞し。近づく敵をかけ惱し。かゝるどんと斫伏せ多人。案内
 ありしれ。賊兵。亦是首の樹の蔭。彼首の巖角。おまこり。射る。箭
 と冬蟲の如く。これと防ぎか。うら母。後方より。賊將。全廣
 大里の城を攻おとし。王女。追留め。擧ふせん。とて。夥の軍兵。を引卒し。
 咄と噓て。とせ。身方。身方。と。辟易して。文小。戦ふ。く。後。なく。
 勅。活路を。索。う。て。射て。おとされ。死。さ。り。の。その。数。と。あ。は。れ。そ。が
 中。小。儀。翰。田。平。ハ。王。女。と。落。し。す。わ。せん。乃。ハ。二。騎。相。こ。り。れ。と。進。ま。ん
 退。う。と。儀。翰。と。棟。孫。が。箭。面。を。立。向。ひ。田。平。ハ。全。廣。を。遮。り。留。め。て。

且く挑戦しとくども。身方悉落らせて。外お援の兵。な。ら。ば。二。人
 り。あ。と。も。射。と。く。め。ら。れ。て。乱。軍。の。中。に。討。死。せ。り。その。際。ハ。王。女。ハ。一。方
 の。田。を。斫。ひ。て。走。り。ま。あ。ふ。る。不。智。田。人。と。追。蒐。れ。敵。近。ま。れ。ハ
 川。く。て。薙。刀。と。り。て。切。と。り。退。け。ハ。亦。馬。と。と。や。め。二。里。の。山。路。を。
 黄昏。ろ。は。で。賊。兵。亦。お。ち。れ。つ。と。て。も。死。と。ん。れ。命。な。り。と。も。
 良。人。の。先。途。を。見。定。め。て。と。こ。ろ。一。と。ち。二。條。の。流。矢。ハ。馬。ハ。射
 して。歩。行。ま。な。り。ま。ひ。つ。嶋。袋。を。投。て。走。り。ま。ま。つ。ふ。その。日。も
 既。お。暮。果。て。敵。も。中。や。く。遠。く。な。り。ね。子。四。の。こ。ろ。う。と。あ。の。日。も
 幸。じ。て。走。り。ま。き。是。処。う。と。む。り。え。多。人。ハ。草。木。し。ぐ。く。庚。燼。と
 かりて。巖。石。の。こ。と。と。ろ。ろ。ぐ。お。あ。り。れ。と。れ。が。な。は。燃。焼。の。株。と。こ
 と。煙。の。中。お。横。り。目。も。あ。て。れ。ぬ。分。野。を。彼。胡。蘆。谷。お。そ。く。

春風 長月 推遷卷之五



春元



えのよ
王女血戦

脱
田

春元

而亦彼田軍火牛喘ぐに似たり。うらかましくもつが丈夫の
 亡骸やうらとされと薙刀をりて灰木を掻きよれつ索しをへむ。
 こゝに為朝の乗まひぬる馬とおげくして鬚尾毛焼かこまりて。
 つと浅ましくも敷れり。この馬既おかくのごとし主もいそ
 う存命ありん鑑の金具のこびりて。おん白骨のええふまのねも。
 敵の為おとられられ飲よしや最期も後々とも。おまじ煙と身を
 ちしてつら誠心をあじけしけん。寔に君と日の本れ王孫名家の
 曹司とせれ多く果報微く。故國おその身を容れらんとぞ海お
 浮きて亦この邦の乱れと討おさりとて。稍逆臣と誅戮し。仁義の
 軍兵起し多く神も憐とえそまじ。冥助意報めらるる世を
 さうさぬの桑の弓折れてうひさく。妖賊が計策に舞られて猛火の

中お焼れくも武運の末の是非もなし。おりひ出れば七年の月日
 もおまじ無陽月小琉球の嶋北あて。こゝのを救ひまひり。この
 良人を救ひほと焼野の雉子つまこひふ。音とのこぞなくかひまや
 と声お限りおかれは脱く。男子まうりの賢妻勇婦も。こゝろ乱
 れて涌えぬ涙の石湯掬めくも。黄くお泉へかくらんとして半焼残る
 巨木の枝お引めつえつ。烈火の中へ飛入らんとなす人ば死しれ
 馬の腹の中より。やよすちまへと嘆びまへ。遠出まのり為朝の
 王女おひろけられ。且怪と且飲び。この恙あつてそのせし飲と忙
 ちく走りより。回べらるもつらくも。好くもび袖をぬらしくぬくも。
 為朝も亦王女の只ひとり。索まらるる怪て。まづその故を問まへ。
 王女の大里山のわがまめて。前後の敵お攻とて。れ儀翰田平おを

とし兒として士卒多く討死し大里以下の城へ全廣み棄置せり
 首尾を告ぐるべ為朝頻ふ嘆息し。つゞても亦矇雲が幻術よ
 とうられて松壽鶴龜が生死存亡ともあらずに白日俄頃も黑夜
 とありて。おりのごとの鳩袋お感ひ入り。遂に火攻せられ脱れ
 ざるもあらずされば。今へかうと必ひ定めて刃を腹におか當り
 倍と必ひ久とことありて死せし馬の腹を截割その血を吸て
 咽喉を潤し。馬の腸を吐出して。その腹中を躲れれば辛く
 猛火お焼とと。火とおのづから流ししが敵にあらざるとあり
 から。あや今までもおざりた。あうおん身も又賊軍を殺脱て
 夫婦のうきもに九死を生一死おひねれこと。天地神明の祐
 ありお似たり。凡切業おとてんとおりありのとも火とも踏水おも

入れおし只堪かられを堪忍ひて時の到るおまのあまを
 漢の高祖の七十餘戦も九里山の一戦お勝る。四百餘羽を
 これ今松壽鶴龜お失ひて。左右の翼おしとりとも彼おも
 又存命ておあおるるば。ひとりお聚る日もある。おのり
 城おぐれ士卒おまて。この刃を寓おかともは。夫婦が命を
 天おまおして脱れおあおの脱して試ん。あうび賊兵おま
 悔おもそのかひある。おうら。おう生とまるといそがしたる。お
 王女の火急の肘は臨して必死を脱れおひねれ。良人の頓智を
 感嘆し。夫婦忙しく鳩袋をきり出て。通霄走りもあふ。ゆく
 ともあうに詰且具志路のあやかり松山の磯おまおま。あ
 あうれごもこの荒波をむひへ渡れ小嶋もなう。いと太中りあ

春言四別片亦送卷之五

蘆荻のこ敏もりて漁の蟹の台屋もあつた既小饑疲とく。
今も一歩も運びごまれば。このいふせんとして。夫婦巖子尻
次かけ。忙然として中を折る。具志頭のかつお物の音して。
為人を捕捕と。とり声間ちかく。多少とあつた城の
軍兵一群がらてぞ出まされ。為朝夫婦猛しとらども。いそく
疲れと中人の御ぐにさへさ。前と海かり。後小敵あり。寔お
脱まかへんが。蘆の中。に櫓の音して。舟漕よとるとおぼし
たが。忽地訛とる声とく。

濱子鳥迹の都へかえり。舟の松山小喜どのとぞ鳴く。
それ日本。の濱岐瀉。これ琉球具志頭の荒磯もおぼし名
あ。おふ君まら山。の浦おあ。都へかえり。船賃とんとく。

是のく。とくかへり。揺ひちり。畢竟く。に船次考とく。
その人をあつんと。は次の巻お解つとく。を聴をし。

椿説弓張月合遺卷之五畢



